

Title	19世紀初頭南アジアから海路による集团的メッカ巡礼
Author(s)	加賀谷, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 76(3) p. 55-p. 65
Issue Date	1988-11-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81211
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

19世紀初頭南アジアから海路による集団的メッカ巡礼

加賀谷 寛

イスラム時代の中東と南アジアの交渉史は、歴史的に710年にムハンマド・ブン・カーシムのインド侵攻以来、多面的かつ緊密であるが、この分野の研究は従来、部分的にしか行なわれていない。小論は19世紀20年代に現われた南アジアのイスラーム復興・改革運動の指導者で、ムハンマディー教団 (*ṭarīqah-e-Muḥammadīya*) の師、サイイド・アフマド・バレールヴィー (*Sayyid Aḥmad Barelvī* 1786-1831, 以下サイイド・アフマドと略)⁽¹⁾ の率いた海路巡礼団を取りあげて、中東・南アジア交渉史の一コマに照明を当てる試みである。同時にこれは、著者が企図している南アジア・イスラーム史研究の一部を成すものである。

本論が主として依拠した文献はつぎの二つであり、いずれもウルドゥー語で書かれている。

(1) *Ghulām Rasūl Mihr, Sayyid Aḥmad Shahīd*, (初版1954), Lahore, 1968 (3rd. ed.)

(以下 M. と略)

(2) *Maulānā Abū'l - Ḥasan 'Alī Nadwī, Sīrat Aḥmad Shahīd*, (初版1939), vol 1,

Karachi. 1958 (以下 N. と略)

一. 集団的巡礼の企図

18世紀から19世紀初頭にかけて南アジアからのメッカ巡礼の実情は不明な部分が多い。この時期のイスラム世界内部での新しい胎動については、John O. Voll が指摘するように、⁽²⁾ (イ)ハディース学の復興、(ロ)聖地メッカ・メディナとの密接な交易・巡礼・学問交流、をあげることができる。(イ)については、18世紀にデリーの代表的な学者シャー・ワリーウツラー (*Shāh Walī'Ilāh*. 1702-1762) がハディース学を中心に据えて独自の学問体系を展開しており、(ロ)についても、同じく彼自ら聖地に巡礼するだけでなく、同地に滞在して自ら学問的接触を行なった。当時の聖地の学者のなかには南アジア出身の学者の名も見られ、学問的交流が盛んであったことを示している。

それよりも時代は少しく下るが、サイイド・アフマドは、南アジア・イスラーム教徒がメッカへの巡礼 (ハッジ) を宗教的義務 (*farḍ*, 複数では *farā'id*) として実行しなければならないと自覚し

た。ムガル朝後期の南アジアではメッカ巡礼は、エリートのウラマーや環インド洋地域の交易に関係のある商人によって、しばしば行なわれていたとしても、一般のイスラーム教徒にとって極めて限定されていたのが実情であったと考えられる。事実、南アジアの一部のウラマーは教令 (fatwā) で教徒の質問に答えて、メッカ巡礼の義務を教徒から廃していた。⁽³⁾ このようにメッカ巡礼が廃れかけていたとき、彼とその弟子の学者シャー・イスマール (Shāh Ismā'il. 前記のシャー・ワリーウッラーの子孫) とマウラーナー・アブドゥル・ハイイ (Mawlānā 'Abdu'l - Hayy 同じくその親族) はそのような教令を拒否して、メッカ巡礼が宗教的義務であることを説いた。

彼の宗教活動は、南アジアのイスラーム教徒に宛てて非イスラーム的慣行を棄てさせ、イスラーム本来の義務を守るように呼びかけるもので、1818年デリーに彼が出て、上記の二人の学者の参加をえて以来、デリー、U.P. 地方を中心にイスラーム改革運動として展開していた。これら地方各地を彼らは巡回説教し、彼らに共鳴したイスラーム教徒が多数入門 (bai'at) し続けていた。このようにヒンドゥスターンに多くの入門者を集めて彼がその指導者となり、活潑な宗教改革運動を展開していた。このようにしてヒンドゥスターンを拠点に、彼らが南アジア西北部に移動 (hijrat) して、そこでイスラーム教徒の解放のために聖戦 (jihad) を行なう計画を進めていた。この計画の準備が出来たところで、突然、彼はメッカ巡礼を決意した。⁽⁴⁾ 事実、移動と聖戦はメッカ巡礼から帰郷後に直ちに引続いて着手された。

二. 巡礼団の組織と出発

この巡礼団の特色は、旅行資金を全く持たないイスラーム教徒男女を集めて、挙行されたことにある。彼の方針は、巡礼の成功と不成功を全て神に委ねることであった。すなわち旅行途上地のイスラーム教徒商人・有力者の厚意ある寄附や接待に主として依存して旅行することであった。1816年以來、巡回説教ですでに信望を得ていた彼は民衆を説教に集めて集団的に入門させる能力と自信を持っており、さらに商人・有力層から運動資金を自発的に集められるほどのカリスマ的權威をもっていた。

こうして巡礼団は彼の故郷ラーイ・バレイリーに集合した。婦人・子供を伴う総数約430人で、いくつかの班に編成され、それぞれの班に責任者が任命された。⁽⁵⁾

(1)シャー・イスマールが率いるパルトとサハランブールの人々 約250人

(2)マウラーナー・アブドゥル・ハイイの率いる班 約40人

(3)指導者の近縁者たち 約40人

(4)ラーイ・バレイリー、ジャーイス、ナスィーラーバードなどの人々 約100人

一行はヒジュラ暦1236年シャッワール月末、⁽⁶⁾ 西暦1821年7月30日、月曜に、神に全てを委ねて全く無一文で同地に出発した。一行のなかには旅費の用意がないのに、メッカ巡礼が可能かどうか疑うものもいたが、指導者は、一行に、道中、物足りないこと、自分たちの労力で賃金を得る決

意を持つこと、得た金銭や物は一部を費し、一部は道中のためとっておくこと、指導者はメッカ巡礼には同行巡礼者たちを優先させ、自分は最後に出発すること、敬虔さを旨とすること、を説いた。

一行はガンジス河沿いに川船に乗り、一部は川岸沿いに徒歩で、アラーハーバード、バナーラス、パトナを経てカルカッタを目指した。

指導者は途中の滞在地でイスラーム教徒に改革を訴える説教を続け、多数の入門者を獲得し続けた。⁽⁷⁾ また途中の地の商人・有力者が一行を歓待し、多額の寄附を行なった。神に全てを委せるという指導者方針は、現実にはこのような歓待と寄附によって実現可能となった。

3ヵ月半後カルカッタに近づいた地点で、ベンガルの上流階級出身でカルカッタの名士、イギリス東印度会社の裁判所に持ち込まれ事件を一手に扱っていたアミーン・アッマド（Munshī Amīnu'ddīn）なる人物が彼の一行を迎え歓待した。指導者はカルカッタに三ヵ月滞在し、連日同地のイスラーム教徒住民に説教した。とくに寡婦を再婚させ、未割札のものに割札を施した。ベンガル各地から数千のイスラーム教徒が彼の宿舎を訪れて、非イスラーム的慣習を悔い改め、彼に集団入門を誓った。⁽⁸⁾ このとき、彼の宗教活動がカルカッタで行なわれ、ベンガルとイスラーム改革運動が結びつくこととなったと考えられる。また同地に当時、ティプー・スルターンの子孫が住んでおり、これが彼に接触を求めた。⁽⁹⁾ またカルカッタと交易で結ばれていたビルマのペゲーからのイスラーム教徒の有力者も彼に入門したという。⁽¹⁰⁾ ベンガルのイスラーム教徒入門者の一部が、このメッカ巡礼団に加わり、さらに後のジハード遠征に参加するものもあった。⁽¹¹⁾

ここで、彼はヒンドゥスターンから西方に向かってスインド、グジャラート方面に向かわず、なぜガンジス河を下り、カルカッタに向かったかの理由が問われなければならないであろう。なお帰路もボンベイに寄港しながら、迂回してカルカッタに上陸して同じ路をとっている。第一の理由として、当時、ガンジス河はヒンドゥスターンとカルカッタを結んだ交通の動脈であり、また交易の太いパイプとなっていたと考えられる。第二に、この旅行に彼が多くの日数をかけて、途中の市や町でイスラーム改革を住民によびかけて入門者をつくりだす意図があったからである。彼が巡礼に引き続いて行なったジハード運動参加者が彼ら入門者からも出ており、また資金もこれらの地域から送られることになったことは、このときに彼の運動の基盤づくりが行なわれたことが判明する。このメッカ巡礼はこの基盤の拡大と強化を兼ねたものであった。

三. 巡礼船の準備

サイイド・アッマドとその一行はカルカッタで巡礼船を手配した。

当時、カルカッタはメッカ巡礼の有力な出航地であったと考えられる。というのは、あるイラクの人が巡礼のため、わざわざカルカッタに来ていた例が記されている。同地にはアラビア方面に向かう、かなりのアラビアやトルコの交易船が集まっていた。巡礼期にはこれらの交易船が巡礼者を載せたものであろう。

一行は、はじめ11隻の船を手配したが、実際には往路では10隻を雇った。用船の交渉は総計13,880ルピーで成立したというから⁽¹²⁾ 各船、約1,400ルピー強の計算となる。

一行は各船に団長 (amīr-e-qāfilah) を指名し、陸上の隊商と同じく、船旅中に乗客はその指示に従わなければならなかった。他に船には、船旅中の食糧、水、食器類を積み込んだ。一行のうち、金を全く持たない貧民たちを除いて、693人分の船賃 (kirāyah) として1人当り20ルピーが集められた。巡礼者のなかには婦人もおり、そのため3隻に特別室が設けられ、そのための費用も別に支払われた。

なおこのとき、一行を歓待したカルカッタのイスラーム教徒豪商 Shaykh Ghulām Husayn Khān Fakhurut-tujjār があり、自己所有の船の提供を一行に申し出ている。⁽¹³⁾ 彼は持ち船4隻が空いているので一行の巡礼のため供したいと申し出た。これは、アラブやトルコの船だけでなく、カルカッタやベンガルのイスラーム教徒の持船があったことを示している。

結局、一行は次の10隻を雇ってメッカ巡礼に向かった。

番号 ()	船 名	船長 (nākhudā, kapitān)	巡礼団の乗船数	備 考
1 (1)	Fathu'l-karīm	Mḥd. Ḥusayn Masqaṭī	76人	
2 (2)	Taj	不明	65人	帰路も利用
3 (3)	Ghurāb Aḥmadī	Aḥmad Turk [Rūmī]	50人	軍船で11門の大砲を備えた。
4 (4)	Fayḍ-e-Rabbānī	不明	175人[75人]	最大の乗船者
5 (5)	Fathu'l-Bārī	'Abdullāh Billāl 'Arab	70人	船長はハドラーミーで、モカに自宅があった。
6 (6)	Daryā Baqā	Sayyid 'Abdur-Raḥmān	150人	帰路も利用。指導者とその一族が乗る。古船で船足が遅い。
7 (?)	'Aṭiyatur-Raḥmān	Mḥd. Ḥusayn Turk	67人	帰路も利用。軍船、60門の大砲
8 (8)	Fayḍur-Karīm	不明	50人	
9 (?)	'Abbāsī	不明	40人	
10 (?)	Fathur-Raḥmān	不明	50人	

() 内は出航順。[] は N. による。

これらの船がカルカッタなどのベンガル船か、マラバル辺の船か、それともアラビア海で活動していたアラブやオスマン朝の遠洋船かは明確でないが、船名はいずれもイスラーム船で、船長名もほぼイスラーム教徒である。船長の出身地・帰属は、一部はハドラーマウト、オスマン朝、などと予想できるが特定できない。なかに「トルコ人」船長の軍船が二隻みられ、オスマン朝のものと推定できるが明確でない。いずれにせよ、19世紀初頭のベンガル湾には、イギリス船、地元のベンガル船、オスマン朝 (?) の船、アラブの船、などが多様に入り混じっていたと考えられる。

同表によると巡礼団の乗船数合計は793人と計算されるが、M. は753人と記しており、一致しない。

N. は計800人と記している。こうして750～800人の一行が上記10隻に分乗して出航した。

なお帰路は2, 6, 7のほか、アラビアの地で新たに *Maliku'l-Baḥr* を加えて計4隻で帰国している。このことは、帰路には一行のうち各自アラビアの港から南アジア向けの船を容易に求めることが出来た事情を示している。当時、それだけ海路、南アジアとのあいだに頻繁に海路の往来があったことであろう。

なお表の乗船数は巡礼団一行だけのもので、その以外にも乗客を乗せていたので、実際に乗船したものの数はこれよりさらに大きかったとすれば、各船、100人～200人ほど乗り込んでいたと考えられ、その程度の規模の遠洋航海のイスラーム教徒の帆船が目安に考えられるであろう。

四. 出帆

出航の日は、M.N. のいずれの文献にも明確でないが、N. の注では、ジュマード・アルウラー月と推定しているから、⁽³⁴⁾ 1822年2月前後であろうか。

巡礼団一行は、カルカッタのチャンドプール岸壁 (*Chāndpūl Ghāt*) から小船? (*kishti*) に分乗した。下汐 (*jazr*) だったため岸に停泊したままで満汐を待った。翌朝の満汐でギーラー・カーチー (*Gīlakāchī*) に着き、ここから沖の本船 (*jahāz*) まで2コース (約4マイル) だった。

出帆順は番号1から順次出帆し、一行の指導者サイイド・アフマドの乗船が殿についた。これを見ると、彼らは船団を組んで航行したのでなく、各船が相前後して同じコースを進んでいったと考えられる。

船路はカルカッタからセイロン島付近を通過し、コモリン岬で方向を転じた。この付近は風が強く航海者から危険視されており、難所としておそれられていた。この海域を無事通過して、南インドのマラバールのアレッピー (*Alappī. Alfi*) 港に停泊した。同港はコーチンより、やや南に位置するというのが、手許の地図では特定できなかった。

同港からカリカット (*Kālīkat*) に寄港した。指導者は同港に上陸して町の中心の池の中に建つモスクに滞在した。

カリカットを出帆して航路を西にとり、ラッカディヴ (*Lakkādīp*) 諸島に向かい、そのうちの一つ、アミーナー (アミーン) ディープ (*Amīna or Amīn dīp*) で水を積み込んだ。ここからソコトラ (*Suqūtrā*) に向かって転じ、ヤマンのアデン港に上陸した。カリカット出帆後アデン港着まで、なん日を要したか伝記には記されていない。

五. アデンからメッカ、メディナ巡礼と参詣

アデンに上陸して、彼はアラビアの神聖な土地に最初の一步を踏みしめた感激で、神に感謝して祈りを捧げ、羊を犠牲にした。この地の聖廟 *Sayyid ʿIdrūs* に参詣した。同港に一泊説と三泊説があ

る。

アデンを出港して、難所として知られるバブ・ル・マンデブ (Bāb al-Mandeb. 別名 Bāb Sikandar 一般に Bāb al-Mandūb) 海峡から紅海に入った。この入口に山の島があって危険だったので、彼は安全を祈願した。

船はヤマンの港モカ (Mukhā) に入港し、一ヵ月停泊した。船は積んでいたインドからの荷 (交易品) をここで降ろし、また船長は故郷であるハドラマウトのズファール (Zufār) に私用で出かけたからである。巡礼月までまだ4～5ヵ月余裕があったので彼も同地に滞在した。同地の金曜のモスクで彼は礼拝を行なったが、その洗浄のホウド (ḥaud) で人々が裸で洗浄するのを、イスラーム法上非難すべき行為 (qabāḥ) と認めて、同地の法官 (qāḍī) に訴えた。法官は一行が滞在するあいだは洗浄のホウドに裸で出入りしてはならないと命じた。ここにも彼のイスラーム改革者としての抗議が見られる。またサヌアーの有名な学者カーディー・ムハンマド・ブン・アリー・ショーカーニー (Qāḍī Mḥd b. 'Alī Shokānī) にハディースについての著書があると聞いて、彼はアラビア語に通じているアブドウル・ハイイに命じて手紙を書かせ、村の法官を通じて同書を求めさせ、同書はのち帰郷後インドに送り届けられた。

モカを出てフディダ (Hudeydaḥ, 英 Hodeida) に停泊した。同地でヒンドスターン出身の友人と会っている。

船が聖域の境 (Yalamlam?) に到ると、一行は全身を沐浴してウムラ用の巡礼布 (iḥrām) を着けた。礼拝ののち、彼が先頭で「ラッバイク」と声高く唱えた。続いて一同が揃って斉唱した船上に彼らの声が響き渡った。

目的港ジッダに着くと、先着の一行はすでにメッカに向かっていた。メッカに滞在中のハイデラバードの商人が彼の徳を聞いて同地に出迎えた。彼は四日間滞在した。この間、同地にある聖廟「エヴァ廟」(Mazār-e-Hawwā) にも参詣した。ここでカルカッタ出帆時に各船の団長に預けた諸費用の金を清算する仕事を、シャー・イスマールに任せて、自らメッカに向かった。ここで2,100ルピーの船旅中の出費を清算した。

ジッダからハッダ? とフダイビーヤ (Hudāibīya) に泊り、三日目にメッカに到着した。メッカに入るには二つのルート、「低い (asfal)」と「高い (a'lā)」があり、彼は預言者のメッカ開城の故事にならない、後者の道をとった。この日は、ヒジュラ暦1237年シャーバーン月18日、¹¹⁵⁾ 西暦1822年5月21日であった。彼は墓地ジャンナトゥル・ムアッラー (Jannat al-Mu'allā) に向かい、同墓地に埋葬されているハディージャの墓に参詣し、しばらく祈願した。サラーム門 (Bāb al-Salām) から聖モスクに入った。カーバの周囲をタワーフしたのち、アブラハムの立ち所で祈拝を捧げた。ザムザムの泉の水を飲んだ。サファーとマルワの間を往復してサーイを行なって、一先ず巡礼布を脱いだ。これは、家郷を出てから10ヵ月のことであった。

彼は毎日、ウムラの儀式を行なったという伝と、月曜、金曜だけ行なったという伝がある。¹¹⁶⁾ 彼と一行は、こうしてメッカにシャーバーン月18日から、ラマダーン月、シャッワール月、ズ・ル・

カード月を過ぎたのち、巡礼月ズ・ル・ヒッジヤ月を迎えた。

この間、彼はハディース学者のシャイフ・ウマル・ブン・アブドゥッ・ラスールと会見している。またオスマン朝から金品を彼に贈ろうとしたが彼はこれを返した。⁽¹⁸⁾ 断食明けの祭日には、同地の有名な人士たち、シャイフ・ムスタファー・イマーム・ハニーファ、ハージャ・アルマース・ヒンディおよび宦官のシャイフ・シャムスッ・ディーンそしてシャイフ・ハサン・アフアンディーが彼の徳に従い入門を表明した。⁽¹⁹⁾

一行は巡礼月八日、ハッジの儀式を開始し、ミナーとムズダリファを経てアラファートに到り、九日にラフマ山に集まってウクーフを行なった。彼と一行は長い祈願（ドゥアー）を行なった。その祈願の一つは、一行のだれも「ハージー」の称号で人々に呼ばれないようにということだった。なぜならばハッジはイスラームの義務でありそれを果すのは特権となることでないからであった。ここにも彼の改革者的な姿勢が明らかにみられる。一行はこの神聖な場所と神聖な日に、彼の徳に従うこと（bai'at）を改めて表明した。⁽¹⁷⁾ 夕刻、彼らはムズダリファに急いだ。群集に一行は紛れて散り散りになった。僅か数人が彼に同行したのみであった。ミナーでジュムラートの塔に小石を投げつける儀式ののち、犠牲をほふった。彼一人で、百匹以上の山羊を準備していた。彼は三日間ミナーにとどまってその間、毎日犠牲を供げた。それからタワーフのためメッカに着き、全儀式を了えた。

巡礼を了えると引続いて翌月はじめから、同地の多くの学者、名士たちと会見した。その一人に、ブハーリーの『サヒーフ』をカスッターニーの注とともに暗誦している北アフリカの人 Sayyid Mhd. も含まれていた。ジャワ人・ブルガール人たちも彼を師として入門した。⁽²¹⁾

一行のうち学者モウラーナ・アブドゥル・ハイイは聖モスク内でハディース集『ミシュカート』を講じ、シャー・イスマールは、シャーワリーウッラー著『フッジャトゥッラー・ル・バーリガ』を講じた。また前者は師のサイイド・アフマドの『真直の道』（*Ṣirāt-e-mustaqīm*）をアラビア語に翻訳し、その写本を分かち与えた。またサヌアーのカーディー・ショーカーニー（既出）もハッジに参加しており、モウラーナー・アブドゥル・ハイイとモウラーナー・マンスールッ・ラハマーンの兩人が会見し、二人はその著書の写本を贈呈された。

ムハッラム月末、一行はメディナに向かった。120頭のラクダを雇った。武器はメッカに置いた。旅程は、ウスマン朝末期に「王道」（*ṭarīq-e-sultānī*）と呼ばれていた11の道程から成っているものに従った。武器を一切持たず、賊に襲われようとも無抵抗を貫くことにした。あるとき盗賊が現われたが、彼は屈強な男たちを集めて4隊を編成し、一行の前後左右に配した。この間、ラクダ曳きの頭が賊と交渉して、賊は引き上げていった。また途中で遊牧民が2挺のピストルを売りにやって来たので求めたが、あとでメッカで、それがヒジャーズ太守アフマド・パシャのものと判明した。それを太守に返すと、太守は新しいピストルを賜ったというエピソードもあった。スフラーの谷では、アブー・ウバイダの墓に参詣した。

サイイド・アフマドはこの旅行中、病氣になった。それで意識を失うこともあった。だがメディ

ナに着くまでには元気になった。12、3日でサラーム門から聖モスクに入った。シャーフィイー学派のイマームに従って朝の礼拝をした。東の空が白むまで勤行を続けた。直ちに預言者のモスクに参詣 (ziyārat) した。宿舎として、ジブリール門に接するサイイド・サムフーディーの家を借りた。この家は、カリフ・ウスマーンが殺された所であり、のち同地にシャイフの公邸となっていた。彼は、メディナの全ての聖跡、ジャンナト・ル・バキー、サイイドナー・ハムザ、ジャバル・アハド、「二つのキブラのモスク」、「カバー・モスク」、などに参詣した。

当時、ヒジャーズとネジドの「ワッハーブ」勢力とがなお緊張した関係にあった。後者との和平が結ばれて数年経たばかりであった。ヒジャーズ側は「ムワッヒド (=ワッハービ)」らしい人物を警戒して取り締っていた。一行のなかに、モウラヴィー・アブド・ル・ハック・ネーオタナヴィーがあり、気性が激しかったので、「ワッハーブ」教徒の疑いをかけられ、裁判にかけられた。モウラヴィー・アブド・ル・ハイが身代金を払って交渉して、釈放させた。この人物はメッカに戻るまでサイイド・アフマドに従い、帰路ヤマンのサヌアーに行き、そこでカーディー・ショーカーニー (既出) の許でハディースを学び、免許を得てインドに帰国した。

ここに見られるように、インドでイスラーム改革の運動を代表した一行は、同様の運動をネジドを中心に展開していた「ワッハーブ」教徒とヒジャーズで接触・交流することはなかったし、ここでワッハーブ教徒からイスラーム改革の影響を受けて、イスラーム改革運動を始めたわけではなかった。一行の目的も彼らワッハーブ教徒と接触することにはなかった。巡礼以前に、すでに一行は改革運動に立ち上がっていたからである。

一行はエルサレムに向かう計画であったが、同行者のうち消極的な声があったので中止した。同地で冬の寒さが厳しくなり、シャイフ・アブドゥッラティーフ (既出) が毛布を購入して一行に配った。

一行はメディナに約一月滞在したのち、ラビー・アル・アッワル月9日、帰路についた。一部病人を同地に残した。ズ・ル・ハリーフアにさしかかってウムラー用の巡礼布を着けた。

一行のうち、船の便が見つかったものから順々に帰国させた。彼は聖モスクで礼拝に没頭した。あるとき、カッバを回る儀礼の際中に彼は、一族が自分と一緒にここに居ることであり、いっそ「ダール・ル・ハルブ」の地、インドに帰らずに、ここに滞りたいと考えた。しかし、見えぬところ (ガイブ) から声がして、もし汝がここに滞るならば、われは他のものにその事業 (スィクとの戦い) をさせるだろう、と仰せられた。ここで彼の帰国の意志が固まったという。²¹⁾

一行はメッカ、メディナに一年二ヵ月、滞在したことになる。

六. 帰路

サイイド・アフマドの一行のうち、既述のように約半数がそれぞれ、船便を見出しては帰国したが、最後まで残ったものたちは、シヤッワール月15日、西暦1823年6月25日、メッカを離れた。

ジェッダ港では、往路に雇った番号、2, 6, 7 および新らしく雇った Maliku'l-Baqr 号を加えて4隻を編成した。往路が10隻の編成であったから、その半数以下の乗客であったと推定される。

このうち、もっとも船足の遅いマリク・ル・バフル号に、指導者が乗船した。ジェッダ港を出帆したのは、ズ・ル・カーダ月初めのことであった。

モカでは、往路と同じく、約1月滞在した。犠牲用の動物は、同地で求めた。犠牲祭は船上で迎えた。同月20日、西暦1823年8月16日、指導者を載せた船はボンベイ港に到着した。ソコトラから12日目に到着した。²² それはボンベイの船乗りが驚ろくスピードであった。同号に先行した船も16日で到着していた。他の3隻はソコトラからマラバルの地に直行した。

一般には、アラビア半島のアデンから南アジアのマラバルのカリカット、あるいはグジャラートのスーラトまで、通常3週間を要したと言われており、²³ この日数がアラビア海航海の一つの基準であり、帆船は約一ヵ月分の水と食糧を用意して3週間で渡っていたという。季節によって差があるとしても、彼らの航海日数が2週間前後であったのは驚異的であった。

ボンベイでは、すでに到着を手紙で知らせておいたモウラヴィー・ウンス (Mawlavī Uns) によって歓迎を受けた。彼のモスクはメモンワラ区にあり、同モスクに滞在した。彼ら一行は連日、歓待され、指導者はここで、教えを説いた。その教えを受けいれて、その息子の他、4名がここから彼に同行した。彼らは同地に18日間、滞在した。

彼らはここから陸路、故郷に向かわなかったのはなぜであろうか。おそらく、ボンベイからデリー方面への路より、海路カルカッタへの路が安全で一般に利用されていたからであろう。

こうして往路と同じく、マラバルのアレッピーに寄港したのち、往路と同じくコモリン岬を廻って目的地カルカッタの土地を再び踏んだ。

それは1239年サファル月6日、西暦1823年10月12日のことであった。カルカッタ出港後、約1年半ぶりに無事戻ったことになる。

カルカッタでは、以前に一行を歓待した豪商シャイフ・グラーム・フセイン・ファフルッ・トゥジャールはすでに没していたが、巡礼に同行したその息子が先に帰っており、一行を歓待した。彼らは同地にしばらく滞在したが日数は不明である。滞在の理由は、一行の乗った一隻アティーヤトッ・ラハマーン号が行方不明となり1月以上も連絡が絶えたからである。指導者サイイド・アフマドはその無事を祈り続けていた。ついに同船の無事が判明して一行は安心した。

再び往路と同じくガンジス河を廻り、各地に滞在して、土地の有力者たちの歓待をうけ、すでに彼の徳に服した入門者たちとの接触を再確認しながら、故郷ラーイバレイリーに、シャーバーン月29日、西暦1824年4月29日、指導者が帰着した。出発後、2年10ヵ月のことであった。²⁴

出発のときには無一文で哀れな姿だった巡礼者が帰着したときの姿は色つやもよく元気そうで立派であり、出迎えたものは見違えるほどであったと言う。²⁵

全旅費は7～8万ルピーを下らなかったと推定されている。これに雑費（貧者への援助）を加えると10万ルピーに達したであろう。²⁶ 一行には旅の途中から加わったものも一緒に多数同行してい

た。また指導者の徳を慕って多くの人々 ('ām za'irin) が会いに集まって来た。彼らすべてのものに食事を施した。このあと残額を調べると、1万ルピー残っていたと言う。⁽²⁷⁾

むすび

19世紀初頭に行なわれたこの巡礼は第一にヒンドゥスターンからの集団的巡礼がほとんど絶えていた時代に、大規模に実践されたもので、とくに注目に価する。当時のウラマーの一部が、途中の海路の危険を考慮して巡礼を宗教的義務から外すことを認める教令を出していたのに対してサイイド・アフマドの企図は、この種の教令に反発して、巡礼の義務が実行可能なことを自ら実践して示すことであった。

第二に、同時代のアラビア海航海は歴史的に不明な部分が多く、この巡礼団の記録がその一部でも明らかにするための具体的な一つの事例を提供してくれるものと考えられる。

第三に、巡礼団の副産物がルート上のガンジス河流域のイスラーム教徒住民への説教と組織化であり、これらが南アジアの「ムジャーヒディーン運動」の支持基盤となったことと関連していると考えられる。

第四に、指導者サイイド・アフマドのイスラーム改革運動はネジドの「ワッハーブ」運動と類似し並行するが、前者は後者からの影響でなく、巡礼時の接触もなく、すでに巡礼以前から自発的に展開されていたことが判明した。

註

- (1) Art.[AḤMAD BRĒLWĪ], *New Encyclopaedia of Islam*, Leiden.
- (2) pp.64ff, John O. Voll, *Islam*, Colorado and Essex, 1982.
- (3) p.176.M.
- (4) p.175.M.
- (5) p.182.M.
- (6) p.182.M. 同じく p.210.N. なお p.17, Shaykh Muḥd Ikrām, *Mawj-e-Kauthar*, Lahore, n.d. では同月一日となっている。
- (7) p.190.M.
- (8) p.208.M.
- (9) p.208.M.
- (10) p.210.M.
- (11) p.211.M.
- (12) p.213.M.
- (13) p.214.M.
- (14) p.273.M.
- (15) p.221.M. なお p.283.N. では同月29日と記されている。
- (16) p.224.M. の脚注。

- (17) p.224,M.
- (18) p.222,M.
- (19) p.223,M.
- (20) p.224,M.
- (21) p.228,M.
- (22) p.294,N.
- (23) p.300, 家島彦一・他編『イスラム世界の人びと・4 海上民』
- (24) p.231,M. p.229,N. なお p.18, Shaykh Mḥd Ikram, op. cit. では2年11ヵ月となっている。
- (25) p.231,M.
- (26) p.231,M.
- (27) p.231,M. p.299,N.